

現在までの中国哲学美学の研究において、中国近代の学者である王国維(1877～1928)は、中国近代哲学美学の創始者として、その地位を確立している。彼の美学思想の中で最も多く取り上げられてきた文献は、彼独自の視点から中国の伝統的な詩論の再構成を試みた『人間詞話』(1908)である。

その文献を理解するためには、『人間詞話』に至るまでの王国維の美学思想の発展の脈絡を掴む必要がある。こうして彼の思想の形成期に注目する研究が数多く行われてきたが、その殆どは、王国維の哲学美学思想におけるドイツ観念論の影響を扱うものである。近年の代表的なものに清華大学文学部教授羅鋼の『王国維とパウルゼン』(2005)があるが、羅氏は、王国維の哲学美学思想の形成に影響を与えたのはカント(『判断力批判』)やショーペンハウアー(『意志と表象の世界』)であるという通説を否定し、パウルゼンの『哲学概論』こそが最初に王国維の思想に影響を与えたと主張する。だが、筆者の調べたところによれば、パウルゼンの『哲学概論』を含む上記三つの著作は、すべて王国維が1902年に翻訳した日本の哲学者桑木厳翼の『哲学概論』原文中において、読者へ紹介されていた書籍である。(『哲学概論』24頁、105頁、285頁)さらに言えば、王国維の初期(1903-1904)の哲学に関する論文、『哲学弁惑』、『論性』、『釈理』、『国朝漢学派戴阮二家之哲学説』などにおいて、桑木厳翼の『哲学概論』(1900)及び同じく1902年に翻訳した元良勇次郎の『倫理学』(1893)と符合する点が多くみられ、この影響が大いに認められる。

本発表は王国維の初期の哲学美学思想における『哲学概論』と『倫理学』の影響を明らかにする。結論から述べれば、イギリスやフランスと比べ、ドイツ観念論に重点を置いてその理論を紹介した桑木の影響を受け、王国維は当時流行っていた嚴復が導入したイギリスの哲学にあえて批判的な目を向け、精神的にドイツ観念論の哲学を中国に導入していた。また、嚴復のように西洋哲学の概念を性急に中国の固有の哲学の概念によって解釈するのではなく、中国の概念とはっきり峻別したうえで、西洋哲学の概念の正確な理解を図った点も語源に遡って概念を忠実に理解する桑木の影響によるものである。『倫理学』において、元良は西洋の倫理学思想を中国の先秦の儒学思想や宋明の朱子学、陽明学における重要な概念(「性」や「理」など)の比較によって説明を行った。その方法論を受け継ぎ、王国維は西洋の哲学との比較によって、中国語の哲学思想の重要な概念を見直そうとしていた。このように王国維は哲学者として出発した時から、西洋哲学の概念を重要視し、その比較によって中国の固有の哲学にける概念の再構築を試みようとしていた。そのことを明らかにすることによって、『人間詞話』における核心的な概念「境界」の重要性を再確認し、その含蓄を日本哲学美学との関連性という角度から再検討されることが期待できる。